

* テューダー朝における

『アーサーの死』の受容と変容

マロリーの『アーサーの死』はテューダー朝のおよそ百年余りの間に、キャクストンをも含めると六度に亘り上木された。各版は当時の版本の例に漏れず、沈黙裡のうちに編者・植字工による改訂が施されている。こうした改変は、言語の現代化、読者の文学趣味、時代の価値観などの文化的・社会的文脈の中で、取り行われたものである。中世から近代へ正に移らんとする時に世に放たれたマロリーの作品が、ルネイサンスの初潮を見たテューダー朝の読者により、どのような読み取り方をされたのか、また読者はマロリーが描こうとした世界を充分捕捉し共有しえたのか。こうした問題を、マロリー写本、キャクストン版、ドウ・ウォード版の間に見られる相異を検討することにより、その一端を明らかにしてみたい。

キャクストン版は、一九三四年にウィンチェスター写本が発見されるまでは、ほぼ忠実にマロリーの作品を伝えていると考えられてきた。しかしこの画期的発見は、写本自身もマロリーの手稿本ではなく二人の写字生の手になる改訂本であること、キャクステューダー朝における『アーサーの死』の受容と変容（向井）

向井 毅

トン版には更に大幅な編集の手が加えられていること、などを明らかにした。また近くは、刷り上がったばかりで生乾きのキャクストンの活字がこの写本に写っていたことから、キャクストンの工房には彼自身が底本とした編集用写本に加え、このウィンチェスター写本も同時に存在していたことが、L・ヘリンガの研究で明らかに⁽¹⁾なった。

キャクストン版が印刷完了したのは、一四八五年七月三一日と奥付けにある。この頃は騎士道精神が遠く弊え、騎士身分の頹廃が嘆かれた時代である。キャクストン自身も『騎士道 (Order of Chivalry)』の序に於て、

ああ、イングランドの騎士よ。かつて実践されたかの気高き騎士道の約束・習慣は、今やいずこに。貴殿のなさることは湯浴みと賽子ばかり。△中略▽こんな怠惰はすぐにお止めなさい。そして聖杯伝説やラインスロット、ガラハド、トリストラム、ベルスフォレット、バルチバル、ガーウェン達の高潔の物語をお読みなさい。

と荒廃した騎士身分の生活振りに義憤を表わす。また社会的には、ランカスター家最後の切札ヘンリー・テューダーがヨーク家のリ

チャード三世を敗る天下分け目の合戦ボズワースを三週間後に控え、ヨーク家劣勢の色が濃くなりゆく頃であった。文化的にはルネイサンスの胎動が始まり、近代的精神を宿す人達が文学サークルに現われくる頃でもあった。

このような文脈をアーサー王物語の出版と絡めて考える時、三つの問題が浮かび上がる。第一に、騎士道精神の頹廃という現実の深い反省に立って、古き良き時代の騎士の有り方を、ホイジンガの言う「理想的生活形式」として仰ぎ、騎士道を復活可能な夢として追求する精神態度の存在が出版の背後に措定される。このような精神を持つ人々にとっては、アーサー王物語に描き出された騎士道生活と現実の生活とは連続する世界であり、学びの対象と化した騎士道ロマンスの世界は、秩序を失くした現実の世界を理想に向けて牽引する強力な手段として、彼等には映ったと思われる。かくしてロマンスは、その道徳的・教訓的側面に価値を認められ、まるで騎士道の手引書の如く読み取られることになる。こうした精神を体现する人物として、マロリーの作中人物ガレシの人物造型に寄与したとも言われるウォリック伯リチャード・ボシヤンを挙げる事ができる。彼の死後著わされた自叙伝『ウォリック伯リチャード・ボシヤンの華麗な一生 (*The Pageant of the Birth, Life, and Death of Richard Beauchamp, Earl of Warwick, 1389-1439*)』は、ロマンスから飛び出たような彼の姿を描き、アーサー王の騎士たらしめる彼の姿勢をよく伝えていく。

第二に、アーサー王の歴史的事実性が問題となる。エドワード四世・五世、リチャード三世を宿願かなって王位の座に登頂せしめたヨーク家(エドワード三世の第五子エドモンドが始祖)は、

ヘンリー四世・五世・六世を擁するランカスター家(第四子ジョン・オヴ・ゴントが始祖)に較べ、男系血統序列に劣っていた。ヨーク側は、エドモンドの息子でエドワード四世の祖父に当るリチャードが、アーサー王に遡る家系図を有すモートイマー家の娘アンと結ばれたことで、アーサーの血を継ぐ正当な王位継承権を主張した。バラ戦争にその極を見た両家の対立の陰に、アーサー王の歴史的事実性をめぐる論争があったことは疑いない。かくしてこのロマンスは、アーサー王の存在を信ずる人達にとっては、年代記の様相を帯びることとなる。

第三として、真実らしさ、因果律、愉しくかつ為になる、端正さなどの特質を文学に求め、ロマンスを「卑猥」で「信じられない」、「ありえぬ」話として非難する新古典主義的文学観の抬頭がある。エリザベス一世の家庭教師を勤めたロジャール・アスカムの「この本の喜びは、あからさまな殺戮と卑猥の二点にあり。この物語は訳なく人を殺し、巧妙な手口で姦通に耽る者どもを、いとも気高き騎士と見做す」という痛烈な批判に代表される様に、『アーサーの死』は、新古典主義的文学観の波を正面に被り、禁書に墮すことになる。⁽²⁾

テューダー朝の諸版は総て、こうした社会的・文化的圧力を背景に出版されたが、今改めてチャクストンの仕事振りを問うてみれば、したたかで目配りの行き届いた彼の姿が結像する。

チャクストンは序の中で、アーサー王の史実性について賛否両論を挙げた後、「ここに書かれてあることの総てが真実であると信ずるか否かは、読者諸氏のご自由です」と、誠に曖昧な態度をとる。彼の言質を避けるこうした態度の背後には、印刷進行中リ

チャード三世が、亡き父の跡を継いで間もない甥のエドワード五世とその弟リチャードの二人をロンドン塔に幽閉、殺害したことで、『既にヨーク派内に分裂の兆が見えていたこと、キヤクストンの庇護者で『アーサーの死』を出版依頼した人物（‘one of special’）と目される第二代リバーズ伯アントニー・ウドヴィル（彼の妹エリザベスはヨーク家エドワード四世との間に、後のエドワード五世を設けており、王の後見人としてアントニーは、アーサー史実を利用してウドヴィル家の興隆とヨーク王権の安泰を図った）が、志半ばでリチャード三世の手に倒れたこと、また印刷完了時にはヨーク王権は風前の灯となっていたこと、更には、新王となるべきヘンリー・テューダー（ランカスター家ヘンリー五世の寡婦キャサリンとウエールズのオーウェン・テューダーとの間に生まれた子）が、ヨーク派の王権裏付け手段であったアーサー史実に対し如何なる態度で臨むのか、十分に予知できなかったこと、などが関係していると想像される。

N・ブレイクは、第一と第二の帖（ここには序と目次が収まる）が他の丁付けと異なること、本文の章付けに欠番の誤りがある場合、目次では本来一章である筈の所が欠番をも含めた複数章になっている（例えば、本文では四巻一八章の後に二〇章が続くが、目次には四巻一八・一九章と表示されている）ことを理由に、キヤクストンの序は本文印刷完成後、つまり七月三十一日以降に書かれたと推論する。⁽³⁾ ならば、『アーサーの死』が新王政下でも受け入れられるよう、負の要因になりうるアーサー史存説には言質を入れず、印刷依頼者アントニー・ウドヴィルの名の特定を避けたことが、よりよく諒解される。

テューダー朝における『アーサーの死』の受容と変容（向井）

キヤクストン版の本文を写本と比較する時、刊行本の騎士の言動が騎士道の手引書の如く理想の姿に様式化しているのに気がつく。例えば、ローマ皇帝ルシウスの使者がアーサー王に朝貢を求める件。写本では、「灰色の目」をし「使者の態度に激怒した」と描かれるアーサーの「形相のすごさに使者は恐れをなし、」身の安全を乞うて用件を伝える。王は畏縮した使者に、「憶病な腰抜けども！」と罵言を浴びせる。一方キヤクストン版では、「朝貢を拒めば戦争を仕掛け、諸侯・諸王の晒者にしてやる」という尊大な使者の侮辱にも耳を傾け、評議會を催す間ローマ皇帝名代に相応しい饗応を提供する。また使者が帰国する際には、必要経費を与え、国境まで案内させたという写本にはない一節をも書き加えている。⁽⁴⁾ ここに、好戦的なアーサー王が、今や寛大で礼儀と対話を重んじ、議会让人さえ彷彿させる柔和な賢王に変容しているのが見て取れる。

更に例を挙げれば、アーサー率いる軍隊が西ヨーロッパ一帯を征覇し、王自身がローマ法皇の手により皇帝の戴冠を受けると、臣下の者は次のような言葉遣いで、王に帰国の許可を求める。

陛下、我々には結婚した妻がいます。どうか妻と戯れの一時、休息の一時をお許し下さい。

（ヴィナーヴァ版 二四六頁）

修羅をかくぐり、無事生きながらえた戦う男の語気の荒さ（特に ‘to spore us with oure wyffis’）が、あまりに露骨で卑猥な響きを持つと思えたのか、キヤクストンは、

ご帰国なされますようお願い申し上げます。我々には、別れて久しい妻の許に戻り身体を休めるお許しを、お与え下さい。

陛下の遠征は誉のうちに終ったのですから。

(ソマー版 一八二頁)

のように、王の勝利を讃える語句を添加し、粗野な言葉を婉曲的な表現に改め、上品で形式ばったスピーチに仕立て上げている。チャクストン版の王は更に帰国を許す際、道中の乱暴狼藉を戒め騎士道の約束を破る者には死を以って報いると言葉を付け足すのである。

チャクストン版の騎士道手引書化を示唆する上記の引用は、いずれも巻五から行ったものである。ところで、巻五は写本のほぼ半分に量が縮められていることが知られている。削除の対象は、マロリーが材源の頭韻詩『アーサーの死』から共感をもって書き移した騎士個人の戦闘場面の描写である。一五世紀半ばには、騎士身分は既に軍事的役割を傭兵に譲り、政治職に就いていたと言われる。死を賭けて名誉を得る「軍事的騎士道」(マロリーの言葉では‘*manhode*’)は現実味を失い、専ら「宮廷風騎士道」(同‘*gentilesse*’, ‘*courtesy*’)が彼等の関心の的であったと考えられる。マロリーとチャクストンはほぼ同時代の人でありながら、前者は「礼節」や「優しさ」よりも「勇ましき」を重じ、後者は武器を捨てた宮廷風騎士道精神を大事にした。両者のこのような価値観のずれは、巻五に於て特に顕著に現われている。

かつて筆者は、マロリーが巻五を執筆する際に、粉本の頭韻詩が用いる‘*keen*’, ‘*fierce*’, ‘*hardy*’などの身体形容詞の代り、或はそれに付加して‘*noble*’, ‘*worshipful*’などの価値形容詞を好んで彼が使用している事実を指摘した。⁽⁵⁾この種のマロリーの語彙は、それらが「聖杯探求」の巻以外の箇所でも頻用される事実が示

唆するように、地上的騎士道の規範に従い行動する人間を評価する形容辞である。地上的騎士道社会は評価する他人の目を強く意識する。建て前と本音、言葉と心、外観と内実という二極構造の緊張の上に成り立つ社会と言える。それだけに、偽善に堕する可能性を潜在的に秘めている訳である。騎士の義務である婦人への奉仕(愛)も、騎士個人には崇高な精神をもたらす試練の場となるが、社会的には姦通という罪ある行為となる。それ故に、騎士個人の誉、高潔さという評価の指標が上がればそれだけ、裏では潜在的に悲劇に向うエネルギーが蓄えられてゆくことになる。

マロリーはこうした構図の中に、理想とされたアーサー王国の崩壊とアーサー・ギナヴィア・ラーンズロットのトライアングルを据えた。従って、語り手が‘*noble*’, ‘*worshipful*’, ‘*honourable*’等の言葉を使ってくり返し騎士を描く時、同時に読者の耳には騎士道礼讃の背後に忍び寄り悲劇の足音が着実に聞こえてくるのである。

マロリーのアンヴィバレンツな騎士道社会の提示に比べ、チャクストンは騎士道の理想的な個人的側面に力点を移した。アーサー王の遠征軍が町を包囲した時、「町の人々が受けた苦しみは見るも憐であった」と、騎士の武勇なる大義名分の陰に泣く民衆の姿を写本の語り手は忘れずに語る。また、「彼等は口ではお互い立派なことを言うが、戦場では我先に名を上げ讃えられんとす」と、言葉と心、外なる世界と内なる世界の乖離を指摘する言葉も添える。しかし、こうした騎士道の裏面をつく語り手の言葉は、チャクストン版からは削除されている。マロリーの実際的な眼を通して描き出された騎士社会を前にして、我々読者は、騎士社会の理想的姿への同化と同時に、その理想ゆえに内に潜む破壊的な

ものからの異化、という一つながらに相い反する心理的反応を起す。しかしキヤクストンは、こうした読みを求める作品の基本的構造、論理性は保存しながらも、上述した改訂を施すことにより、この作品には同化という一元的反応を読者に期待していると考えられる。

実際キヤクストンは、『アーサーの死』の序文で、騎士個人の行動の中から教訓を引き出す読み方を勧奨する。

(ここに描かれた人達の)善行に従い、悪を避けなさい。自ずと名誉を得ることになりますから。△中略▽総ては教訓のために書かれてあるのです。

(ソマー版 三頁)

序は作品の読みに枠を填めずにはおかぬ。しかも序は、それが方向づける読み取り方が著者マロリーの意図であるかのような錯覚を誘導する。作品固有の意味の上に塗り籠められた新たな読みは、キヤクストンが読者の好尚に敏感であっただけに、彼個人のものであると同時に時代的なものであったとも言える。

マロリーの同情的でかつ皮肉を含む重層的な作品世界が、キヤクストン版になると理想的で教訓的な世界が強く前面に押し出された。こうした編者の一元的作品理解に通じるものが、彼の人物造型にも観察される。巻二〇で、ラーンスロットは王妃ギナヴィアとの交誼が露見し、王やガーヴェン兄弟との訣別と戦闘を覚悟する。ギナヴィアはラーンスロットの慰めの言葉に對し、

もしあなたが殺されることにでもなれば、私もかつて主に命を捧げた殉教者のように、おとなしく火刑に処せられます。

(ヴィナーヴァ版 一一六頁)

と応える。自らの身を「殉教者 (martyr)」に喩える妃の意識の

テューダー朝における『アーサーの死』の受容と変容 (向井)

裏には、ラーンスロットへの愛が邪な愛、危険な愛、罪な愛であることに少しも気づかぬギナヴィアの姿がある。円卓団が二つに分れ互いに戦い、榮華を誇ったアーサー王国が崩壊するまで、王妃は危険と喜びを相い具えた愛の相に気づくことなく、混沌のままだに交誼を重ねる。キヤクストンは教会への配慮からか、この比喻を好ましく思わず、

かつてキリストに帰依した王妃のように、私は神様のおために、おとなしく火刑に処せられます。

(ソマー版 八〇一頁)

と書き改める。この結果、愛の実相に気づかぬギナヴィアの無知が不明になり、十分な自覚をもって王妃に愛を捧げ、破局を迎えてもなお地上的騎士に徹すラーンスロットとの対照が、それだけ弱められることになる。それに王国の滅びを眼の当りにして初めて、己の愛の恐さ、罪深さを思い知り、世を捨て尼寺入りするギナヴィアの無知から自覚への劇的反転をも失う結果になっている。悲劇に絡まる女性の性を鮮やかに描き抜いたマロリーの意図など、時の好尚に優先を置くキヤクストンには与り知らぬ所であったのであろうか。

キヤクストンの人物造型の平板化を裏書きするように、表現様式も一様化されている。マロリーの文体は発展し、巻一八から二一になると、言語の巧みな駆使が観察される。登場人物は情況に応じた表現を付与され、我々読者は例えば、‘ye’ と ‘thou’ の交替、統語構造の特徴、反復表現の多寡、誓言の有無などから、話し手の心の動きを追うことが可能である。例えば、聖杯探求後のラーンスロットに対するギナヴィアの言葉 (巻一八)。ラーンスロットは二人の噂を消すべく、王妃との密会を手控え他の貴婦

人のために力を尽す。嫉妬にかられるギナヴィアは彼を責める。

「ラーンスロット卿、あなたの愛も褪め始めたのね。私と居ても愉しくないのでしょうか。いつもこの宮廷から身を遠ざけたの女性や乙女達や貴婦人方のために心を砕いておいでになる。」

(ヴィナーヴァ版 一〇四五頁)

彼女のこの言葉には、まだ王妃の威厳が保たれている。しかし暫くして、王妃は自分を避ける理由を問い質すと、ラーンスロットを激しく詰る。

「ラーンスロット卿、おまえこそは憶病な不貞者。色に狂う男。他の女性を愛で抱く一方、私のことは軽蔑する。八中略この宮廷から追放してやる。二度と敷居をまたぐでない。私の供も禁ず。私の目に今後ふれることでもあれば、お前の首を取ってやる。」

(同、一〇四七頁)

ギナヴィアの嫉妬の深まりに呼応して、二人称代名詞が、*'ye'* から *'thou'* に転じ、*'uppon payne of thy head'* という誓言が現われる。キャラクター版では先の会話に於て、ギナヴィアが既にラーンスロットに対し *'thou'* を用いる激しい口調になっているため、写本に見られた王妃の感情の動きが読み取れなくなっている。⁽⁶⁾

キャラクターが一貫して編集の手を加えたのは、マロリーの反復表現である。一例を挙げれば、アグラヴェンとモードレッドが姦通の現場を取り押えようと陰謀をめぐらす最中、ボルス卿の忠告に耳を傾けつつもラーンスロットが王妃の寝室に向う件(巻二

○)で、語り手は、

腕に剣を持ってラーンスロットは出発した。かくして彼はマントに身を包み、自らの身を危険に晒した。あの気高き騎士が。

(...and so he walked in his mantle, that noble knight ...)

(同、一一六五頁)

と反復表現を使って、ラーンスロットを描写する。この後置構文には、彼の行く手に待ち構える畏に思いをいたす語り手マロリーの感情移入が感じられる。無駄のない簡潔性を重んじるキャラクター版では、ほぼ例外なくこの種の反復は書き改められ、単なる事実描写に終る結果となっている。⁽⁷⁾

キャラクターによる手直しは、一文内の反復にとどまらず、スピーチ全体に生起する反復にも及ぶ。典型的な例は、巻二一の死期迫るガーウエンの有名な悔恨のスピーチに伺える。ここでガーウエンは切り出した文句の後が続かず言い淀む。そして頓挫した文を再び立て直すために新たに主語を起す。この結果、彼のスピーチの統語がねじれ、くり返しを伴う複雑な構文となる。キャラクター版は、読み易さと統語の整理を試みて、ほぼ半年の語彙量でガーウエンの悔恨の情を伝える。しかし、ここにガーウエンの感動的なスピーチは文法性、明解性を付与された代りに、痛恨の情がロジックを圧倒するほどに深かった彼の心の内奥を伝えることが出来なくなってしまう。⁽⁸⁾

写本を通して限られた人々の間で享受されていたマロリーの作品は、キャラクター版を得るに至って、その読者を飛躍的に拡げ

た。テューダー朝の読者は再版を望み、これに応えたのがキャクストンの弟子ドウ・ウォードである。彼は一四九八年と一五二九年の二度に亘り、師の改訂版を出す。ドウ・ウォードの二つの版は、先行版同様に二つ折りの大型本であるが、横二段組を採用して一〇六葉（キ版の四三二葉に対しド版の三二六葉）の節約を可能にし、読者の視覚的想像力に訴える木版画を挿入、また目次にだけあった梗概を本文各章の凡頭に再録するなどして、廉価で読み易くかつ読者の便宜を図った版に仕立てている。現在は両版ともに欠損しているが、丁付けから考えてタイトルページ（奥付けから判断して第一版は *Le mort d'arthur* 第二版は *La mort d'arthur*）が付いていたと想像される。

ドウ・ウォードは師キャクストンの序を再録する。しかし両者が狙った読者層には違いがある。キャクストンは「貴族・紳士・淑女」を読者としたが、ドウ・ウォードはそれに「一般民衆（*common-ynalee*）」を付け加え、所謂「読者の民主化・大衆化」を試みた。⁽⁶⁾

ドウ・ウォードはキャクストンを踏襲し、この物語の道德的・教訓的側面に関心を置いているようである。彼が本文に加えた書き替えのほとんどは、言語上の不自然さを正し、内容上の矛盾を解消するための技術的な改訂に留る。しかし折り番号 E 3r-4v（巻二一）に於て、彼は沈黙を破り自らの心情を披瀝する長い挿入を行う。その中で、この作品を読むことの道德的効能（ほとんどがキャクストンがその序に論じた項目と同じ）を説いた後、

神が読者の皆様に名譽をお与えになればなるだけ、あなた方は謙虚にならねばいけません。この人を欺く世の移ろいやすさを常に心しなさい。

テューダー朝における『アーサーの死』の受容と変容（向井）

（折り番号 E 4r）

という教訓を垂れて、読者への口上を閉じる。この最後の二文の言葉遣いと調子は、いずれも「聖杯探求」の巻にその出自を求めることができる。前半の文章は、騎士の華と崇められるも神慮を顧みない傲慢ラインスロットに、隠者が与えた諫言の要約であり、後半の文章は、聖杯探求に成功したガラハドが父ラインスロットへの別離の挨拶としてボルスに託した言葉である。⁽¹⁰⁾ドウ・ウォードが心動かし（或は読者に共感を期待し）た内容と表現が、「聖杯」の世界にあるというのは興味深い。少くともマロリーが「聖杯」の巻以降で描こうとした（つまり彼が大事だと思った）のは、ガラハドの天上の騎士道（*heavenly chivalry*）ではなく寧ろラインスロットの地上的騎士道（*earthly chivalry*）であり、ドウ・ウォードのような教訓をもって作品全体を理解されることは、フランス語種本『聖杯探究（*La Queste del Saint Graal*）』が持つ宗教性の世俗化に努力を払ったマロリーの意図に違がうことになる。ガラハド的な世界に照らせば地上的騎士道の世界は否定される。こうした現実を前にして、なおも地上の側に踏み留まり、地上的騎士としてその理想的な生き方を構築するのがマロリーの狙いであった筈である。マロリーの作品はここでも再び、その読みの中心が周縁化されたことになる。

ドウ・ウォードの挿入に見られる作品理解は、内省的なものなのかそれとも彼の商才を逞げせる意図的誤謬なのかは、俄かには判断が付き難い。というも、彼の耳には次のような当時の宗徒人の声が届いていたと想像されるからである。

イギリス人は、各地各教会に、かの円卓団の現実にもありもし

ない物語の代りに、今や聖書を持つに至った。＼中略＼神の光りが彼ら円卓の騎士の卑猥と空しい作り話を完全に駆逐したのだ。⁽¹¹⁾

キリスト教義に悖るマロリーの地上的騎士道よりも、併せて存在する天上の騎士道を強く訴えることの方が、宗教人や文化人の攻撃を和らげる方略であると、ドウ・ウォードが考えても不思議はない。動機は何れであれ、マロリーの作品はここでもまた時代の歪を受けたことになる。

最後に、ドウ・ウォードがアーサー王事蹟に関して筆を加えた事実を指摘して、この小論を閉じたい。彼は師の工房を継いだ当初、キャクストン同様、王家の周りに庇護者を求めた様子がある。実際、彼は即位して間もないヘンリー七世の母后マーガレットのためにヒルトンの『完全の階梯 (Scale of Perfection)』を印刷出版する。時の王朝は先行のヨーク家同様、或は遙かに強力に、その脆弱な王位継承権を強化するために、アーサー王の史話を利用した。ヘンリー七世は妻が懷妊すると、アーサーの王宮カメロットと同定されたウィンチェスターに彼女を移し、誕生した長子にアーサーの名を与える。当然のようにアーサーの実在性に関し論争が繰り返され、幾多もの書物が草さる。⁽¹²⁾ 師の版には、アーサー史実に対して明確な姿勢を躊躇させる社会的事情があった。しかしドウ・ウォードの場合、新王朝がアーサー史実を強力な方略として採用した以上、キャクストンが抱いた危惧は既になく、その上、彼の対象とする読者が師に較べより下層の市民であることから、アーサー史に阿る改訂をより自由に行うことができた。アーサー王がローマ皇帝として即位する壮大な事蹟の中

に、ドウ・ウォードの筆の跡を追ってみよう。ローマ法皇がクリスマスの日にアーサーのために戴冠式を挙行する。この典拠として、キャクストン版は原典の「ロマンヌ (Romance)」を挙げ、ドウ・ウォードは「ローマ人 (Romans)」の語る言葉を挙げ、大陸では今も語られているという点で、歴史的根拠を付与する。⁽¹³⁾ 戴冠を取り行うのは「法皇自身の手 (付点箇所はドウ・ウォードの添加。以下同じ)」「(Popes own honde イタリック体はキャクストン版に欠除。以下同じ)であり、式典には、「ローマ人」のみならず「総ての貴族」(all the Barons)も出席する。アーサー王に屈服した町の人々は、彼を「国王」(soverayne lord)として仰ぎ、王の「忠実なる臣下」(true subjects)として仕えることを誓う。王の臣下は「十分な敬意と尊敬を払」(gret honour and grete worship)、「気高き皇帝」(Noble Emperour と呼びかけて帰国を乞う。王は彼らに「十分な財とほうび」(grete rycheesse and honour キャクストン版は ryche)を与え、帰国凱旋すれば「あらゆる都市・町・邑」(every cyte towne and burgle)の人々から熱い歓迎を受ける。こうした書き替えの結果、ドウ・ウォード版のアーサーは、自らの権威を高め、臣下、国民、征服民の別隔なくあらゆる人々の尊敬を一身に受け、またそれに報いる賢王にして寛大な王の姿となって、読者の前に立ち現われるのである。

以上検討してきたように、テューダー朝の読者が手にしたマロリーの『アーサーの死』は、時の社会的・文化的制約の中で作品固有の意味に時代の読みを上塗りされた版であった。また、アー

サー王ロマンスの世界に詩的想像力を羽搏かせた後世の芸術家が、己の創造欲を駆り立てられたのも、マロリーの原作ではなく、このテューダー的改訂を施された版であった。明年で出版五〇〇年を迎えるキャクストン版が上木されなかったならば、我々の前には、スペインサーの『妖精の女王』もテニスンの『国王牧歌』もなく、漱石の『薙露行』もまた創作されていなかったことになる。

(注)

* 本稿は、日本英文学会第三六回九州支部大会（一九八三年一月一二日、於九州大学）に於て発表した「キャクストン版マロリー再考」の一部を加筆修正したものである。

- (1) Lotte Hellinga 'The Malory Manuscript and Caxton' in T. Takamiya and D. Brewer (eds.) *Aspects of Malory* (D.S. Brewer, 1981)
- (2) J. A. Giles (ed.) *The Whole Works of Roger Ascham*, 3 vols. (London, 1864; repr. AMS, 1965), vol. 3, p. 159.
- (3) N. F. Blake 'Caxton Prepares His Edition of the *Morte Darthur*', *Journal of Librarianship* 8 (4), 1976, pp. 272-285.
- (4) ローマン・サーの本からの引用は Eugene Vinaver (ed.) *The Works of Sir Thomas Malory*, 3 vols., 2nd ed. (Oxford, 1967) に従う。キヤンズマン版からの引用は H. O. Sommer (ed.) *Le Morte Darthur*, 3 vols. (London, 1890; repr. AMS, 1973) に従う。
- (5) T. Mukai 'Malory's Twofold Narrative Style' *Bull. Fac. Educ. Nagasaki Univ.*, Hum. No. 31, pp. 29-41.
- (6) 類例箇所は次の通り。
(V. 1122/21-28: S. 774/13-19) (V. 1127/13-15: S. 778/15-17) (V. 1136/13-23: S. 785/15-22) (V. 1197/32-34: S. 823/

テューダー朝における『アーサーの死』の受容と変容（向井）

37-824/3)

言語の一樣化のために犠牲となった項目と例は次の通り。

Omission of introductory 'now' (pp. 577-1260):

(V. 596/16) (598/22) (601/26) (602/11) (609/33) (624/17) (626/6) (653/27) (684/11) (691/15) (692/3) (699/28) (700/9) (701/1) (702/21) (727/8) (729/31) (730/28) (774/17) (775/13) (782/6) (793/14) (807/10) (808/5) (829/10) (996/17) (1001/11) (1013/25) (1110/32) (1114/16) (1123/34) (1133/10) (1152/9; 20) (1165/28) (1167/11) (1172/1) (1183/13) (1187/28) (1189/9) (1204/3) (1214/3) (1218/18) (1230/18) (1236/18) (1238/28) (1242/5) (1249/27; 30) (1252/17)

Omission of interjectional 'well' (pp. 577-1260):

(V. 695/2) (730/32) (735/14) (806/25) (815/21) (996/6) (1002/9) (1005/1) (1084/35) (1134/3) (1139/8) (1162/24) (1183/27) (1190/11: Well, well→wel) (1197/32: Well, well→well)

Omission of addressing words 'Sir', 'Madam', 'Damsel', etc. (pp. 1045-1260):

(V. 1051/9) (1056/31) (1066/17) (1067/12; 29) (1077/3; 14) (1080/13) (1084/22; 24) (1088/28) (1089/16) (1090/3; 18) (1097/14; 28) (1110/1; 5) (1110/35) (1111/1) (1112/25) (1133/18) (1134/3; 24) (1151/17; 31) (1168/30) (1172/34) (1185/22) (1167/33) (1186/13) (1189/34) (1190/7) (1192/14) (1195/7; 21) (1197/11) (1199/5; 11) (1218/4) (1220/19) (1241/28)

Omission of swearing (pp. 577-1260)

'for soth': (V. 693/22; 30) (694/6) (697/5) (720/12) (757/29) (779/33) (814/31) (981/22) (996/19) (1084/26) (1127/26)
'by my faith': (V. 689/24) (693/4) (698/19) (720/11) (1197/28)

‘by my trouth’: (V. 729/1)

Other interesting examples:

Alas, alas→ alas (V. 1192/32)

Nay, nay→ Nay (V. 969/24; 1200/32)

Help! help!→ Help (V. 1233/32)

(7) 類例箇所は次の通り。

(V. 606/21) (728/13-14) (762/9-10) (891/10) (915/6) (1070/3-4) (1070/13-14) (1071/23) (1167/27-29) (1169/27) (1178/6-7) (1230/25-26)

(8) ガーウマンの両版にちけるスピーチを次に掲げる。

ペロリー写本

‘A, myn uncle,’ seyde sir Gawayne, ‘now I woll that ye wyte that my deeth-dayes be com! And all I may wyte myne owne hastynges and my wyfulnesse, for thorow my wyfulnes I was causer of myne owne dethe; for I was thys day hurte and smyten upon myne olde wounde that sir Launcelot gaf me, and I fele myself that I muste nedis be dede by the owre of none. And thorow me and myn pryde ye have all thys shame and disese, for had that noble knyght, sir Launcelot, ben with you, as he was and wolde have ben, thys unhappy warre had never ben begonne;... (V. 1230/18-27)

ギヤンズムン版

Myn vnkel kyng Arthur said sir Gawayn wete you wel my deeth day is com/& alle is thorou myn owne hastynges & wyfulnes/for I am smyten vpon thold wounde the whych sir launcelot gaf me/ on the whiche I fele wel I must day/ & had sir laūcelot ben with you as he was/ this vnhappy werre had neuer begonne/ (S. 841/31-36)

(9) ウィンキン・ドウ・ウォード版 (二四九八年) からの引用は *STC*

マイクロフィルム、リール番号二二九八に依る。同第二版 (一五二九年) は、*STC* マイクロフィルム、リール番号一六に依る。

(10) 隠者がラーンスロットに与えた助言はヴァイナーヴァ版八九六-八九七頁。

ガラハッドがボルスに託した父への言葉は、同二〇三五頁。

(11) 引用は E. J. Sweating (ed.) *Early Tudor Criticism, Literary and Linguistics* (Oxford, 1940), p. 40.

(12) テューダー朝に於けるアーサー史実論争については、高宮利行「テューダー朝におけるアーサー王熱と『アーサーの死』」(『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』一一号、一九七九年) に詳細な分析がある。

(13) ドウ・ウォードの ‘Romayns’ がロレンスでなくローマ人である証拠として、折り番号 G 6r 一七-一八行を参照。

(昭和五十九年十月三十一日受理)